北海道本別高等学校　「とかち創生学」を核とした取組

校訓

創意実践

育成を目指す資質・能力
① 課題解決力　② 創造力　③ 主体的行動力
④ 協働力　⑤ コミュニケーション能力　⑥ 遂行力

スクールミッション
1 地域の高校として、地域の教育資源を活用した教育活動を通じて、地域の未来を創っていく生徒の育成
2 社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を身に付け、持続可能な社会の実現に努める生徒の育成
3 グローバルな視点をもち、社会の変化や社会課題に対応できる生徒の育成

「とかち創生学」の探究テーマ
1　正解のない課題に挑戦し探究し続ける力の育成
2　次世代に十勝を牽引し地域を支える力の育成
3　グローバルな視点をもって地域を支える人材の育成

地学協働の推進

＝

「学びの質」向上

地学協働の推進とコミスク

令和２年度から

○とかち創生学部会（探究活動）

・１年生：地域理解、地域課題の設定に関する探究活動

・２年生：地域課題解決に関する探究活動

○地域連携部会

・学校行事における地域との連携（学校祭バザーへの商工会の協力など）

・地域貢献活動（ボランティア，地域イベントへの参加など）

・部活動など課外活動（外部指導者参画の推進など）

○異校種連携部会

・国際理解教育･キャリア教育の推進

・小中学校との授業･課外活動連携の推進

・小中高の生徒間･教員間･ＰＴＡの交流推進

探究学習と地域魅力化

グローバル人材

教科横断と各教科･科目の探究的学習

小中教育課程との連動

これまで課題としてきたこと

R2：内容の充実

校内体制未整備

R3：CSを機能させる

管理職から学年へのシフトを始める

R4：コンソーシアム構築

担当者を明確化し、外部関係者との連携強化

コンソーシアムを構築し活動の理解者を拡大

R5：活動の持続可能化

関係者ミーティングの定例化

R6以降：「教育の質」向上

「とかち創生学」における地学協働の特長

生徒に伴走する（継続的に関わる）地域人材の存在

1学年講師 （分野ごとに地域住民6名）	1学年では、地域の魅力を探究し発信することを目指して動画・ポスターを制作する。その際に地域の各分野のプロから話しを聞き、班編成後、インタビューやフィールドワークでお世話になる方々。町議・町教委・警察・道の駅・飲食店など。
2学年探究コーチ （役場・農協職員10名）	2学年では、地域課題について、「現状分析、仮説構築、実践、解決策提案」のプロセスで探究する。その過程で、毎週の授業に参加し、生徒の活動に伴走しながらコーチングをしてくれる方々。本別町職員・農協職員。
2学年課題提案人 （各分野の地域住民5名）	2学年で新たにトライ。地域のリアルな課題を生徒に提案してくれる地域住民。トークフォークダンスで生徒に話をしてくれる。班編制後も質問や疑問に応えてくれる方々。コーチのコーチにもなる。今年度は飲食店・農業2名・農協・役場。

探究を通じ地域の大人と継続的に関わる → **学校と地域が「チーム」に**

講義によるインプットで探究のプロセスを知る

コーチの伴走により継続的に探究活動を行う

コーチMTGで大人も地域課題について探究する

発表を考える機会にする
集大成が町議会での提言

「とかち創生学」を核とした地学協働の成果（アンケート等抜粋）

R4：生徒事後アンケート結果	およそ45%の生徒が、将来地元に戻って仕事をするなど、地域に貢献したいと思うようになっている。
R4：他校との交流参加生徒	視点の違う探究を知れてよかった。自分の質問や意見が他校の発表のブラッシュアップにつながったと聞いて嬉しかった。
R4：教職員自己評価	活動内容が見えていない状態だったが、今年度は創生学に関わる機会が増えて全体像が見えてきた。生徒は創生学で確実に力をつけている。
R4：地域の意見 （ 中学校長 ） （町議会議員） （探究コーチ）	進路学習での高校生の体験談は、中学生にとって非常によい機会だった。高校生がしっかりと自分の言葉で語ることができるのも、「とかち創生学」の成果だと感じる。
	「とかち創生学」は、地域との連携を大事にした素晴らしい時間だと思います。今後も町民を巻き込んだ教育活動を期待します。
	活動は年々充実しているし、関わっていると生徒の成長も実感することができる。それを幅広く知ってもらうためにも、情報発信が重要となる。

まとめ

地学協働の推進　「学びの質」向上

関わる大人たちも生徒と共に「探究」し続ける → 「教育の質」向上